

第二十の if = 伊藤証信師との道縁

さて、この伊藤証信師からは、私は野の思想家たちが、定収なき身にも拘わらず、終世道を求めて止まざる点に「開眼」せられしが、ひとりそれのみに拘わらず、氏との道縁は深くして、私は三十代の後半において、五年有半を師と二人のみにて研学したのである。即ち私は、師より仏教について学び、私は西洋哲学の一端を共に勉強したのであった。そしてその間、私は京都の上終町に住んでいて、師は毎週丸三日間、遥ばると西三河の碧南市西端の「無我苑」より通って来られたのである。

これによりて、私が師より受けたものは、(1)仏教学の大要と、(2)私の哲学体系における形而上学的基礎たる「一即一切・一切即一」的世界である。私の卒業論文はライプニッツ華嚴的というも、ギリシャ末期の神秘哲学の祖たる「プロチノス」であったが、卒業後はライプニッツに転じつつあったのである。然るにいかほど読んでも……その体系の図式は分かったが、それが身に融けて現実そのものが、如実に「单子論」的構造を為しているとは、どうしても納得領受出来ず、もどかしき限りであった。が、伊藤証信師の講義を聞き、かつその著「哲学入門」を読んで、流石の永年の疑問も次第に氷解するようになったのである。思うにそれは、氏が華嚴の一即一切・一切即一の体系を、身を以って体解せられていたる故なり。しかも華嚴哲学とライプニッツの「单子論」的世界観とは、全く符節を合するが如くにて、これ東西の哲学史上最大の不可思議と言うべく、卑見によれば、キリスト教の伝教師の一人が、いつの時代かに秘かに、華嚴経を訳してフランスに伝えたものが、ライプニッツにの手に渡ったものなのかも知れぬ。されば私はもし if 伊藤証信師に会わなかったならば、せっかくライプニッツに取り付きつつも、ついに「单子論」をこなすことは不可能であったに違いない。

さて以上は何れも学問のことであるが、それ以外にも私が師より学んだことは少なからず。その中の最大なるものは、「人間としての生き方」さらに端的には「野の思想家」としての生き方であって、何らの定収なき身にて、しかも従容として生涯道を求められた態度であった。ではその根底は如何なる信念があったのかというと、それは真に透徹せる絶対観というべく、それをある時師は、「神仏の立場からは、賢愚は絶対に不二なり」と言われたが、当時の私は数えの四十歳に近かったが、恥ずかしながら、それが直ちには承服しかねた程度であって、洵に恥ずかしい極みである。が、これ畢竟じて当時の私が絶対観を抜け切らなかった証と言ってよいであろう。

尚、伊藤師の夫人あさ子姉は、美人にて非常な才女であったが、一毛も無い禿頭の夫君を扶けた功績は甚だ顕著であった。